

昭和
三十四年七月二十三日
發行
（三種郵便物認可）
（毎月一回、十五日發行）

（通第一三〇号）

慈

光

目 次

自然と廻心……………	近角常観……………(1)
靈界の人近角常観師……………	福島政雄……………(8)
正信偈私解……………	白井成允……………(15)
一道会の記……………	榊原徳草……………(19)

第十二卷

第一號

自然と廻心

(明治四十三年十月十五日発行求道誌より)

近角常観

今日話さんとする「自然と廻心」ということであります。唯田房が涙を揮つて「歎異鈔」を書く時には、信仰上の間違いが非常に多かつた事と思われるのであるが、兎角信仰上間違い易きは何かというに、一方に於いて如来の慈悲はこの罪深き悪逆の者を見捨てぬとあるお慈悲であると聞く故に、其のお慈悲に慣れて、どのような悪い事してもお慈悲は捨てて下さらぬ。悪い事してもかまわぬのであると、お慈悲に慣れて横着になる方の間違いである。斯くなると如来の親のお慈悲という方は確かり頂かずして、我と我が身で悪い事してもよいという風の横着な心を起すようになる。すると又一方には悪い事してもよいなどと言つてはならぬ、悪い事をして夫れなりでよいということは無いらぬのである。という方の間違いが起つて来るようになるのである。結局間違いはこの二通りである。之は信仰上の問題には殆んどつきもので、悪い事してもよいのじやとい

う方と、悪くはいかぬという方と、この左右何れかに行くが古来からのきまりになつて居るのである。ところでこれを言いますに、親は小供が可愛い、如何程悪くても其の者を見捨てぬのが親しやと言つて下さる。ところがこれを頂く小供の方で、親は悪い事してもかまわぬ。悪い事してもよいと言つて下さるのである。それではこのままで善いのであるかと、親の所に行くは親の慈悲が分かつたのでも何でも無い。親のお慈悲に慣れて自分の心任せにして居るといふものである。

『歎異鈔』の第十六章に
信心の行者自然にはらをもたて、あしざまなることをもおかし、同朋同侶にもあいて、口論をもしてはかならず廻心すべしということ。……………

此の「自然に腹をも立て云々」である。自然に腹が立つのだから仕方がない、悪い事しても自然に然うなるのだから仕方がない、口論をしても自然だから仕方が無いと、何事

も自分の心任せにして、斯くしてもかまわぬ、差支えがな
いと自然に任せて日暮するが「自然に腹をも立て云々」の
御言葉ならんと思うのである。これは私初めこの心が起り
易いのである。

すると一方に信心の行者とある者が、そんな事をして居
てはならぬ「信心の行者自然に腹をも立て……………口論をも
してはかならず廻心すべし」と、廻向をせなければなら
ぬ、善い心を起さなければならぬのであると言ひ出すこと
となるのである。

すると弥々お慈悲に氣附かせて貰うのは何処であるか。
前の自然にして居てよいのでも無ければ、一度々に、い
かぬくと廻心するでもない。すれば何が真実の道であ
るか。今の『歎異鈔』の十六章のことをお示し下されたの
である。一方に悪いこととしてもよいというから、一方に廻
心せなければいかぬとなるのである。皆共に間違ひであ
る。

次のお言葉には、

……………この条、断悪修善のここちか。……………

一度一度に心得違ひを直すというは、一度一度に善を修し
悪を止める断悪修善の心地か、である。一辺一辺に廻心し
て、一辺一辺に自分の罪を滅して助かる我々の往生ではな
い。然らば自然まかせて助かるのか、というにそうでもな

い。然らば真の自然、真の廻心とは何であるか。真の廻心
とは、そのような自分の心でこしらえた廻心ではない。

……………一向専修のひとにおいては、廻心ということ、ただ
ひとたびあるべし。……………

である。我々心に真に如来のお慈悲を頂き、真に廻心する
は、唯一度である。一代に廻心懺悔は唯一度あるのみであ
る。而して、

……………その廻心とは日ごろ本願他力真宗を知らざるひと、
弥陀の智慧をたまわりて、日頃のころにては往生かな
うべからずとおもいて、もとのころをひきかえて本願
をたのみまいらするをこそ、廻心とは申し候え。……………
である。

今日話したいのは茲の一つである。ここ一つを聞いてさ
え頂けば、外に言う事はないのである。表より裏より、色
々言うが、極まる所はこのひと所である。我々自分の心
が悪いとて、悪い儘自然にまかすのでもなければ、又悪い
心を我とわが手で抑えるが本当でもない。何が本当かと言
えは「日比本願他力真宗を知らざる人」である。日ごろ広
大の弥陀の本願を知らざる人が、ということひと所が肝腎
である。

なお詳しく言うならば、我々この世で自分の悪心を止め
たいとて、止められるような人間では無い。善い心を起し
度いとて、起るような者ではない。罪惡深重の身なのであ

る。善き心を起せ悪い心を止めよ、綺麗な心にならねばならぬと言われても、実は然うは思うも、然うなる事が出来ぬのである。然らばそうならいでもよい、ならいでも差支えがないと聞いて、それならば、これなりで宜しいかと安心が出来るかというに、仏がかく言うて下さるのだからと思ひ、幾度自分の心にきめつけて見ても、矢張りこれよいとは安心することが出来ぬのである。

して見れば、我々悪くてもよいと安心は出来ず、それかと言つて善い心としては微塵も起す訳には行かず、左右何れにも行きよりのなき我々である。処が仏の本願は、その行きよりの無き我々、思うまじきことを思ひ苦しむ我々を見て、かかる罪深きして見ようなき者を、哀れと見て下さるが、如来の廣大の本願のおまこと心である。悪くともよいと言つて下さるのでは無い。小供が一步でも悪に近づくと見て、それでよいという親は一人もないのである。けれどその善くない、悪い事をする小供故に、其者を如来廣大の親の恵みより見て下され、其の悪い事をする奴故に、我々その者が可哀想じや、何うかその悪をひるがえて、早くこの恵みに氣附かせて遣り度い、という、これが如来の親心、此の外に仏の本願は無いのである。いつも言う『歎異鈔』第一章の御言葉、

弥陀の本願には老少善悪のひとをえらばれず、ただ信心を要とすとしるべし。そのゆえは、罪惡深重、煩惱熾盛

如くである。其の母の子を思うて下さる思ひは如何に、即ち魚の母が子を育てるに、子を念ぜざれば子は皆腐れ爛れしてしまう。魚の子の育つは、偏に魚の母の念力によるのである。その如く十方諸仏は我々十方衆生を哀れみ、この私に大悲の親の思召しを知らせようとて、永劫の昔より我々を護念して居て下さるのである。その護念もひと通りの護念ではなく、母の子を思うが如くである。それも子一人に親一人と言おうか「十方の如来は衆生を一子の如く憐念す」十方の如来は皆我々を、一人の子の如く哀れみ下さるのである。

又『略文類』の中には、

三世の諸仏如来出世のまさしき本意は、ただ阿弥陀不可思議の願を説かんとなり。

と。三世諸如来も又我々を哀れみ下さる。十方と言ひ三世と云う。十方は十方法界ありとある仏のことである。三世は過去現在未來三世の諸仏である。この三世十方の諸如来が、我々に對し、母の子を思うが如くに日夜我々を哀れみ、我々を念じて下さる。その斯くして我々に知らそうとして下さる所は、結局何であるか。

「……ただ阿弥陀不可思議願を説かんとなり」である。この多くの仏が最後に何をお知らせ下さるのであるか。即ち「大悲の広大な親がまし／＼て為すまじき事なし、思うまじき事を思う、その者を哀れみ、その者を救

の衆生をたすけんがための願にてまします。云云。

如来の遣る瀨なきお心で見下されると、我々は涯へ今落ちかけて居る小供なのである。哀れ今落ちて怪我をするが、今落ちて身を亡ぼすがと如来のお心は小供の危い状を見て、悪い事してもかまわぬと言つて下さるのではない。あれあんな危い事をして居るが、あれは実に善くない。あの様に自分の事に目がつぶれて、あの様な危い事をして居るのである。当にならぬ事を当にし、頼みにならぬ事を頼みにし、歎くまじきを歎き、望むまじきを望み苦しんで居るのである。実にそれが可哀想であると、その我々の迷いの様を見て、大悲の思ひ止むに止まれず、現われて下されたのが阿弥陀仏である。阿弥陀仏とはかかる我々の様を見て、此の私が哀れだという、このお慈悲の外に、阿弥陀仏のお心は無いのである。

段々話が広くなりますが、いつも言う如く三世十方諸仏のお心というも、この阿弥陀仏の廣大な慈悲を我々に知らすために種々にこの私を哀れんで下さる、その遣る瀨なきお心の外に十方諸仏のお心もないのである。『愚禿鈔』には元照律師の『阿弥陀経義疏』の文をお引きなされて宣わく勢至章に云わく。十方の如来、衆生を憐念したまうこと母の子を憶するが如し。大論に曰く。譬えば魚母の若し子を念ぜざれば子即ち壞爛する等の如し。

十方の如来が私を哀れんで下さるは、丁度母の子を思うがうために阿弥陀仏と姿を現わし、南無阿弥陀仏と名告りをおあげ、光明を以て照し呼びかけて居て下さるのであるぞ」と、これを言い、これを我々に知らせんとの一念より、十方三世諸仏が我々に向うて居て下さるのである。この遣る瀨なきお心が十方三世諸仏の大悲である。

十方三世の諸仏は各自でんで異つた方面に導き、異つた物を与えようとして下さるのではない。諸仏の願まぢまぢなるも、それは皆縁に従ひ機に應じ、手引き、導きをして下さるのである。

弥々知らせて下さる処は、阿弥陀仏の不可思議願、不可思議の親心、これをお知らせ下さる外には無いのである。其の遣る瀨なき親心とは何であるか。即ち若し衆生を我と同じき仏と為さずば、我も仏とは成るまい、と云うこのお心である。言い換えると、仏既に仏とあるからは、一切の衆生を救わずには措かぬ、罪があればある程、その者が可哀想である、障りがあればある程、その者が不便である。

というこのお心である。この広大な親心を頂かせずにはおかぬという広大な思ひを以て、十方の諸仏がこの私を眺めて居て下さるのである。薬師如来には薬師如来の本願があり、地藏菩薩には地藏菩薩の本願があるも、これはこの親心を知らせる為に、その者、その者の機縁に應じて御手引き下さるのであつて、弥々知らせて下さる所は、大悲の阿弥陀仏の親のおまこと心、これをお知らせ下さる外には無

いのである。

『和讃』に

諸仏の護念証誠は、悲願成就のゆえなれば
金剛心をえんひとは、弥陀の感恩報ずべし。

斯くの如く諸仏が色々手を廻わし、姿を代えてお導き下さるが、結局この弥陀の大悲を知らせて下さる外はない。しかして斯く諸仏が弥陀の本願の証契に立ち、護り念じてこの御慈悲一つに引き入れて下さる所以のものは、「諸仏の護念証誠は、悲願成就のゆえなれば」で、もともと弥陀の第十七願に、十方諸仏がこの我が心を伝えるようにとの阿弥陀仏の本願がある。これがもとになりかくは十方諸仏が証誠護念して下さるのである。故に言い換えて見れば、十方諸仏の証誠護念ということも、結局は阿弥陀仏の遣る瀨なき広大な御親心というこのほかにない。かくの如く十方の諸仏は遣る瀨なき思いをもて我々を護り、待ち受けて居て下さるのであるぞ、釈尊がこの世に御出世下されたもこの広大な御親心を知らせんとの外にはないぞと、これが親鸞聖人の御教化である。

其処で話が前に戻りて「日ごろ本願他力真宗を知らざる人、弥陀の智慧をたまわりて云云」の御示しがここである。言葉が多くなりませうけれども、ここは何とも言うに言えぬ。『和讃』に

十方微塵世界の 念仏の衆生をみそなわし

逆と正法を誹謗するものを除く」の文である。

して見れば悪人だからと捨てられるというのでなく、その浅間しき者、罪の者が哀れである、という遣る瀨なき思いより現われて下されたのが、弥陀の本願である。十方微塵世界、念仏の衆生を撰取して捨てぬというのが阿弥陀仏の御意である。先き程よりいふ十方三世諸仏の仰せというもこの外にない。

以上は釈尊と阿弥陀仏を「釈迦弥陀は慈悲の父母」と、父母に譬えた上より申したのでありますが、又聖人は光明名号の因縁と申して、南無阿弥陀仏の六字名号の父の御名告り、又私を可哀想であると念々念じて下さる阿弥陀仏光明の母、この南無阿弥陀仏の父の名号に呼び醒まされ、八方四千の光明の母は慈悲の懐をひろげて撰取して下さるとお示し下されてある。又さき程も一寸申した『勢至和讃』の御示しの上より頂くと、

超日月光この身には、 念仏三昧おしえしむ

十方の如来は衆生を、 一子の如く憐念す。

子の母をおもう如くにて 衆生仏を憶すれば

現前当来とおからず 如来を拝見うたがわず。

我もと因地にありしとき 念仏の心をもちてこそ

無生忍にはいりしかば いまこの娑婆界にして

念仏のひとを撰取して 浄土に帰せしむるなり

撰取してすてざれば阿弥陀と名づけたてまつる。

十方微塵世界の念仏の衆生を觀そなわし、その者を助けずには措かぬという遣る瀨なき思いを以て見て居て下さるが阿弥陀如来の広大な親様である。阿弥陀仏とはこの者を助けようとの広大な親心、この外にない。釈尊がこの世に現われて下されたは何のためか、偏にこの広大な親なることを知らせ下されんが為である。釈尊が「唯五逆と正法を誹謗するをば除く」とお示し下されたも外はない。ひとえにこの広大な親の慈悲を知らせ度いとあなたの方の瀨なき親心からである。本願に五逆と誹謗正法の者が助からぬとあるからとて、本願が助けぬとあるのでは無い。その如き五逆十悪の者を助けるとある遣る瀨なき親の心が分からぬか、この広大な親のお慈悲がまだ頂けぬか。この悪者が哀れだという親の心からぬ者は可哀想である、この広大な御心も頂かず、悪い事してもかまわぬなど云つている者は、親の本願にも漏れ、母の慈悲にも漏れるぞと、お示し下さる釈尊の御意は、これ程までにしても母の心が分からぬか、親の心が分からぬかと、その広大のお示しが「唯五逆と正法を誹謗する者を除く」の文である。実に広大な御教化であります。それ故この阿弥陀仏の広大な御意を頂かぬようならば、釈尊がこの五濁惡世に出て下された所詮もなくやつてしまう。故に早く此のお慈悲を頂けよとあなたの方の有り切りを打明けてお示し下されたが今の「唯五

大勢至菩薩の

大恩ふかく報ずべし。

かくお示し下さるは何か。大勢至菩薩が我々にこの南無阿弥陀仏を知らせんと遣る瀨なき思いから、日本に於いて法然聖人と現われて下されたのである。御師匠法然聖人はその大勢至菩薩がこの世に現われて、自分を導いて下されたのであると、お喜びなされたのである。かく大勢至菩薩の法然聖人が日本に來り、この南無阿弥陀仏の本願をお知らせ下さるは何故であるか、もとその勢至菩薩が因地に居られた時、この南無阿弥陀仏の念仏の心を持ちてこそ無生忍にお入りなされたのである。それ故此の度その大勢至菩薩が再びこの世に現われ、念仏の行者を導きて浄土に帰入せしめて下さるが、法然聖人御一代の御教化であるとおよるこびなされたのである。而してその法然聖人に遇い聖人がお慈悲にお気づきになるに至つた大もとは、常に言う如く遣る瀨なき聖徳皇太子の御導きによるのである。

『和讃』に

大慈救世聖徳皇 父のごとくにおわします

大悲救世觀世音 母のごとくにおわします

即ち聖人十九才の時、太子の磯長御廟で告命を受け、二十九才の時、六角堂告命の御導きにより、法然聖人に遇い、

阿弥陀仏本願のお謂われをお頂きなされたのである。

さて斯く段々頂いて來ると、この他力真宗の教という事

は外の事はない、大悲の遣る瀨なき親様が、此の罪深き者を見捨てぬとの遣る瀨なき思いより、或は光明名号の縁をもち、或はこの世に現われて釈迦の父、弥陀の母と示し、或は十方三世無量の諸仏と共に、一子の如く憐念して下さり、或は自分をお慈悲に引き入れるためには、大勢至菩薩の法然聖人と顕われて下さり、種々無量の手引きにより本願のお慈悲一つを聞かせて下さる。このお慈悲一つを頂く外にないとお喜びなされたが親鸞聖人の他力真宗である。其処で「日ごろこの本願他力真宗を知らざる人、弥陀の智慧をたまわりて……」この「たまわりて」が有難いのである。「……日ごろのころにては往生かなうべからずと思いて、もとの心を引きかえて、本願をたのみまいらすをこそ、廻心とは申しそうらえ」である。

今迄自分の力で善くせんならん／＼と居たは間違いであつた。今まで自分の悪心を止めなければならぬと、自分で止められるもの如く思うて居たは間違いであつた。此の到底助からぬ、救われぬ此の身を救おうとの広大な御本願であつたか。この我身知らずのこの者をかねて承知で、其者向けての御呼声であつたかと「日ごろの心にては往生かなうべからずと思いて、もとの心を引きかえて」である。

かく、遣る瀨なき親心から哀れまします御慈悲なりし

靈界の人近角常観師(二)

福島政雄

右より、句仏上人近角師他山師

四、外遊二年



明治三十二年から三年にかけて師は宗教法案問題について懸命の努力をせられた。此の法案がとおれば日本国における仏教の立場が他のいずれのいかがわしい宗教に対しても法律上対等に見られるようになり、或はまた国土的野心を持つ宗教などにその地歩を与えて日本国そのものの存立をさえ危くするという懸念があつたようである。それで師は本願寺の句仏上人や莫逆の友池山師などと一緒に懸命の阻止運動をせられ、遂にその目的を達せられた。

此の功績に対して東本願寺は常観師と池山師とに西洋留學の特典を与えてその功績に報いることになり、ここに二師は句仏師同道にて西洋に派遣せられることとなつた。句仏師は別問題として、常観師と池山師とはこれから相共に

かと、氣のついた一念が廻心である。日頃本願他力の親のお慈悲を知らぬ者が、ここに初めて弥陀の本願に気がつき、日頃の心にては往生かなうべからずと思いて、今までの心をひるがえして、この自分を見捨て給わぬお慈悲一つと頂かせて貰うことが出来るのである。結局この一つを頂く外はないのであります。色々言うけれども、私共自分の計らいで幾らよくしたいとて、善くなる心ではないのである。又それが善く出来る位なら、心配はいらぬのである。その善くなれぬ私を承知して、其の者が可哀想との遣る瀨なき大悲心から、長く今まで御苦勞して下されたが、阿弥陀如来の広大な親心なのである。

「日頃本願他力真宗を知らざる人云云」それ故今までの広大な本願を知らなんだ者が、この広大な親心一つに氣づかせて頂く、お慈悲を頂くはこころ一つなのである。この親心に氣が附きてこそ、この罪深き私が罪の深きに心配もせず、又罪深くてもよいなどという横着心を起すでなく、かく罪深き極悪深重の私が、かくまで深きお慈悲を蒙るとはさてもさても喜ばせて貰うことが出来るのである。「もとの心を引きかえて、本願をたのみ参らす云云」、如何にも如来のお慈悲が有難いと頂かせて貰うことが出来るのである。どうか我人共に、ここに氣附かせて頂き度いことであります。

(完)

西洋の宗教事情視察ということになった。

明治三十三年四月十三日の正午に横浜港を出帆せられた両師は、太平洋の波遙かなる船路も恙なく、米大陸に渡られてからは汽車の旅、ロッキーマウンテンの積雪を望み、ひろびろとしたアメリカの大平原を通つて、シカゴ市に立ち寄つてニューヨークに到着、それから南へ北へ二回の旅行ということになった。大統領をはじめ様々の人々に面談し、ピュリータンが最初に上陸したポストンにおいて、特に仏教信念の萌芽のあることに注意し、各地の監獄や感化院を視察し、諸種の教会を巡歴して、アメリカのキリスト教は信仰というより寧ろ社会という方が適切であることを感ぜられ、教会の周囲には青年の寄宿舎や労働者の集会所、その他色々の倶楽部を以て満たされていることを注意されている。

アメリカの視察を終つて五月三十一日に英京ロンドンに着し、池山師は別になつてドイツに向われたので、常観師はひとり英国視察ということになった。英国ではロンドン

ンのキリスト教を精密に視察し、英国は国教の国であるけれども、ロンドンにおいてはあらゆる宗派が存在し、互に競走している有様を特に注意せられてある。失楽園の詩人ミルトンの遺蹟や、清教徒ウイリアム・ペンの会堂をも後に訪問せられている。特に七月六日、マックス・ミュラー博士に会見して深い感激を受けられた。博士は東洋の聖典殊に仏典を英訳した人である。その十月下旬博士は七十七才で死去したので、常観師はベルリンでそのことを聞いて深い歎息を洩して居られる。

次にはフランスを視察して、仏国聯合公私救恤慈善會議と万国聯合宗教歴史大会に出席し、西洋の学者が日本の仏教寺院に対する希望の条項などをも聴取して居られるが、併しフランスに於ける師の感銘は殊にカトリックというものに對する深刻な感銘であつたようである。その宗教組合が旧教伝導の精兵として非常な活躍をしている有様に注目せられ、ゼシユイットやドミニカンなど二重の鉄門を有する本部を持つていて、他宗の者の入ることを許さず、その伝導には国土侵略という趣があつて恐るべきものであることを痛感せられている。この時の感銘が常観師の後年におけるカトリック反對の動機をなしたと思われる。日本とローマ法王との使節交換に絶対反對をせられたのも、日本の為に恐るべきものを防ぐという意志を以てせられたこ

て道を求めたアウグスチネル修道院を訪れ、その憂悶に沈んだ古室、バイブルを発見して新光明を得た当年の図書館を見ては無限の感を寄せて去るに忍びなかつたと言われている。ウイッテルベルヒでは九十五個条をかかげた寺院に宗教改革の熱を追懐し、ルーテルが常に「予は百姓である、百姓の息子である」と言つたことに深い興味を感じていられる。チューリンゲンの秋は師に深い感銘を与え、ワイマールのゲートヤシラーの遺跡も師にドイツ精神の精粹はチューリンゲンの山靈より発したという感じを喚び起したようである。その他ハルレに فرانケが敬虔主義の教化のあとを訪れ、イエナ大学では寧ろ高く水清きところに哲人の静観のあとを感ぜられている。

併しながら常観師がドイツに残された最も有意義な記念はベルリンにおいて釈尊降誕の花祭を始められたことである。時は明治三十四年四月八日、所は「四季ホテル」の広間において行われた。発起者は師を始として池山師その他三人であり、長岡外史の挨拶、判事プロスト氏が仏教道徳を嘆美する演説、姉崎嘲風氏が花祭の歴史についての講話、巖谷小波氏の詩的童話講演、藤代氏の貴婦人と花に関する講演などがあつて非常な感銘をドイツ人に与えたという。花祭はその後引続きドイツにおいて今日まで行われているというのであるから、常観師によつて実によき記念が

と思われる。

パリでは池山師と一緒にあつて、九月十八日から同道にて南独行の途に上られた。ドイツ聯邦は新教の盛んなところと、旧教を主とするところとがある。ストラスブルグは最も旧教の盛んなところであるが、二師は先ずここを視察せられている。新教徒が抑圧せられている有様を聴取し、梵語学の学者ロイマン博士というに面談された。次にウウルテンベルヒの首府シットガルトに行き、新教団で信仰の深いことはドイツ第一と評されるだけあつて、日曜日の礼拝の盛んな有様を見て、そぞろに宗教改革の當時を追憶して居られる。一週間の伝導會議に出席し、また諸種の社会的施設を視察せられている。此の地の青年会が粗食の会食で楽しく語りあうことや、幼年者の園遊会がリンゴ園の実にあつて居る中で行われ、終日運動し、或は遊び、或はリンゴを食う有様を興味を以て見学し、また土曜の夜には、講師が熱心に説き、満堂の青年が舌を呑んで聴く有様に感じて居られる。なおミュンヘンにも行かれたが、ここはまた旧教の国である。いつもながら旧教の教育教化の巧みなことに感ぜられている。

ドイツではまたマルチン・ルーテルの遺跡を訪われた。それは明治三十三年秋九月のことであつて、チューリンゲン地方をまわり、アイゼナハにおいてはルーテルが隠遁し遺されたと言わねばならぬ。その他オーストリア、ハンガリー、オランダ、ベルギーの諸国をも遍歴し、三十五年二月四日の早晩ベルリンの宿において夢さめ、父母の慈訓を想起して無限の感謝の情に堪えなかつた時、忽ち帰朝を促す電報に接し、ローマの旧都を一見して帰東ということになつた。かようにして三月二十四日長崎に帰着、西洋二ヶ年の旅と視察との間にも常に大經を読んで仏教經典を此の人生の生活の上に生かす道を感じせられた師はこれより信仰上の大活躍の時期に入るということになつたのである。

五、開信三十年

常観師が西洋の旅から帰朝せられたのは師が教え年三十三年の春であつた。これから六十二年の秋に至るまで約三十年の歲月は親鸞聖人の信仰を中心とする熱烈な獅子奮迅ともいふべき活躍の時代である。帰朝後直に本願寺その他から僧侶として代議士となり、政界に活躍すべき事を勧められた師は断然これを拒絶した。西洋を視察して師が深く感ぜられた事は政教は分離すべしという一事である。宗教が政治に依頼し、政治が宗教を利用することは、此の人生を不純ならしめ、またこの世界に争闘を起す根源となるという事は、師が西洋において殊にカトリック教の視察から得たる大教訓であつたと思われる。故に帰朝後の師は純

然たる宗教の立場から唯一筋に信を説き且伝える事を以て最要事と考えられたのである。元來師の性格から言えば政治家的天分を多分に持つていた人である。その天分のあるところを直接政治界に發揮せずして、純一信仰伝道の上を生きて行かれたという事は実に尊いことと思う。師が拒絶せられた結果その代りとして推薦せられて政界に出た人は安藤正純氏であり、安藤氏は真宗の信仰に立つ政治家として昭和三十年秋その逝去に至るまで政治の道に於いて一貫せられたのである。

常観師は帰朝後早速その六月一日を以て東京本郷森川町百五番地に求道学舎を創立し、天下の青年を相手として信仰を説くことを始められた。此の求道という名は大無量寿經から出ているのであり、道を求めて止まずんば必ずその結果に到達するという意味において名づけられたものである。此の求道学舎において師は求道者に卒先する態度を以て、熱烈に信を求め信を説かれた。教行信証、歎異抄、和讃などの要文は師の講話の度毎に口をついて出で、聖教が師であるか、師が聖教であるかと問いなくなるほど師は浄土真宗の聖教と一体となつて講話せられた。師は吾々人間の心に五分五分根性が止まないということを繰り返して説話せられた。こちらが相手を五分だけよく思つていけば、相手もこちらを五分だけよく思う。こちらが相手を五分だけ

憎めば、相手もこちらを五分だけ憎みかえす。五分五分根性は此の人生に争いをもたらす。これだけで進めば此の世に平和ということは無くなる。併し人間はこれだけで満足が出来るものではない。人間は無限の同情を求め、こちらからどんなに隔て心を持つていても、決して呆れずに、その隔て心の止まない五分々々のこの身を無限にあわれんで、どこどこまでも見捨てぬという無限の同情者は仏陀より外にはない。吾々は此の仏陀の生きたまことを我が身上に受けて、その無限の慈悲に此の五分五分根性を融かされて行くのである。仏陀の慈悲の声を聞け、生きた誠に触れよ、そこにお念仏がある。師は終始一貫お念仏の声の断えぬ人であつた。声に念仏、言々熱血、如何なる人間の苦しみをも悩みをも融かさずには止まない、苦悩の多い煩惱の深い人間を仏陀は殊にあわれみたまう、仏陀は近く吾々の胸の裡、いのちの唯中に入り満ちて、煩惱の吾々をどこまでも見捨てない永遠の眞実生命である。此の仏陀の慈悲に目ざめよとは師が終始一貫して説かれたところである。

信仰を説かれる師には三超越があつたという。それは態度超越、時間超越、比喻超越の三つである。熱心に説かれる時には態度が色々様々になつて相手の如何にかかわらず、両手をあげて動かし全身を動かして非常な熱をあらわし、畳の上に座して居られる時には、次第に膝で詰め寄つ

て夢中になつて説かれる。此のような時には時間を超越して二時間でも三時間でも話し続けられる。姉崎博士の母堂などは此のようにして師から熱心に四時間も続けさまに話されて気絶されたとか伝えられている。また師の比喻超越というのは、氣に入つた比喻譚は何度も何度も十回も二十回も繰り返して比喻を話される。たとえば手織の着物の比喻、姥捨山の比喻、唯信鈔にある救いの綱の比喻などは殆んど講話の度毎に一度は必ず話されるといふ有様であつた。聴く方から言えば、またあの比喻のお話が出たと思ひながらも師の熱に打たれて聴く度毎に感動するといふ有様、実に師の三超越はそれがやがて聴者の心に師の信仰を直に染み込ませる力となつたのである。

求道学舎における講話と相伴つて明治三十六年の二月一日に創刊せられた「求道」誌は次第に全国に普及して、各地に常観師の御縁による求道者が出現するといふことになり、それより師は全国的に遊説せられることになり、その信仰上の感化はひろく遠く及ぶようになつた。青年に対する感化も深く及んで、求道学舎に入れられた青年学生のみならず、外來の聴聞者には実業界に錚々たる人々もあり、殊に明治の末年頃から始められた毎夏の夏期求道会には全国から熱心な求道の人々が集つて師の熱烈な信仰談を聴聞するといふことになり、仏教の信仰界に一脈の清泉が湧い

て流れることとなつた。東京帝国大学の当時の学生の中には其の頃師の信仰談によつて心機転換してそれぞれの方面において信仰生活に入る人々が次第に増加して来た。師は信仰を精神の燈火にたとえられた。暗い部屋も燈火を点ぜらるれば、天井が高く床が低いということがはつきりわかる。信仰の燈火が一たび心に点ぜらるれば此の国家社会における上下の秩序といふものがわかつて来る。親鸞聖人の信仰において心が開かれて来れば、聖徳太子の十七条憲法といふものが如何に大切なものであるかがわかる。それ師の常の言葉であつた。師は実に信仰の上から日本の国家社会の整然たる姿を出現せしめようとする人であつた。此の信念の下に大逆事件の難波大助にも法を説かれた。

師の精神が全国にひびくに従つて求道会館の建立ということが実現せられるようになり、有志の人々の志によつて大正四年十一月三十日会館の落慶式が行われるようになつた。その後十年、大正十五年の四月には求道学舎も改築せられて現存の学舎が落成した。此の間師はなお一貫して西に東に全国的遊説をつゞけ、たゞ一筋に信仰を説かれた。併し大正天皇の崩御と共に全国遊説といふことを中止せられることとなつた。

六、自然法爾

一旦全国遊説を中止せられたけれども、そのままにはす

まなかつた。宗教法案問題が再炎して師は又全国の信徒に呼びかけるといふことになつた。それは昭和二年一月の頃からのことであつた。全国の信徒は師に響應して議會に電報を打つと云ふような活動を行い、遂に此の法案を阻止するやうになつた。一方においてはローマ法王との使節交換問題があつて、これもまた師の大兵力によつて止められることになつた。

然るに此の頃東本願寺には大事件が出来た。それは新法主が前法主句仏師を除籍するという事件であつた。此の事件に対して師は奮然として立たれた。句仏師の行状については色々非難する人があつたが、それは兎に角として、常観師としては、子として父を裁くといふことは信仰上あるべからざることであるといふ意見であつた。それで師は此の問題を掲げてまた全国に遊説せられた。此の時の師の覚悟は実に一死以て信念を貫くといふ心持であり、苦心惨憺、六十余才の老軀を以て全国を駆けめぐり、熱血熱涙を以て除籍撤回の要請を説かれたのである。これは実に師の信仰が此の現実の人生において生きてゐるといふ証拠であつた。除籍を可とする人々は師の此の態度に反対であつた。或る人の如きは師の此の言動は正気の沙汰ではないと言つていた。しかも師の態度は変らなかつた。一意邁進遂に師自身も除籍されるに至つたが、師は決してその態度を

はたらきが大きであつてゐる。「信界建現」誌において常音師は令兄の講話の筆記や歎異抄愚注の稿などを連載して天下の信徒に呼びかけられた。夕陽まさに沈まんとして赫々たる光を放つともいふべきであらうか、静かなる求道学舎の生活からその光輝は全国の信徒の心を照らしたのである。

さりながら常観師の晩年には悲しきことが打ち続いた。満洲事変から日支事変と進展した戦乱の間に師の令息文常君は軍隊に召集せられ、昭和十三年十月一日廬山の戦に戦死せられた。これは常観師にとつては非常な打撃であつた。令息の出征以来此の人生の二河白道の姿を更に痛切に感ぜられた師は一方において歎異抄を自然法爾の心において味読せられた。会館において令息真観君に助けられて講壇に上がり静かに法を説かれたあとの師の告白は歎異抄第九章の心境であるとの一言であつた。師は決して無闇にから元気の強がりやをせられず、淋しい心は淋しい、悲しい心は悲しいと告白せられた。そこに師の自然法爾の生活があつた。

悲しむべきことは更に他にも起つた。昭和十四年二月十八日、宗教団体法案は貴族院を通過した。かようにして百事悉く非なる間に師は静かにそれに堪えて行かれた。而して昭和十六年十二月三日、七十二才を以て示寂せられた。

かえず、後になつて東本願寺は結局反省して句仏師と常観師を復籍した。

併しこの大活躍は遂に師の健康に致命的打撃を及ぼすやうになつた。昭和六年十一月に師は広島及び福岡地方に信仰を説かれたが、東都に帰來してその十一月三十日、腦溢血にて倒れるに至つた。これは実に一命を堪して苦慮活躍の結果であつたのである。それより静養一ヶ年、或る程度迄回復せられたが、併し右手と右足とに不自由を感じられ、これから後の師は全く求道学舎と会館とを天地として静かな自然法爾の生活に入られることとなつた。

これより先、師は福島県大綱の地において如信上人の御遺跡を発見せられた。それは六百年の老銀杏の立つ廢寺であるが、その銀杏は如信上人の墓表である。師は此の寺の山門の側に大記念碑を建て、その除幕式が昭和四年四月十八日に行われた。師がはじめて此の御旧跡に参られたのは或る冬の雪降る日であつたといふ。建碑の業成るや、師は深い感慨を此の地に寄せて、歎異抄にある十余ヶ國の境を越えてといふのは此の地から京都迄といふことであらうかと話されたこともあつた。

一方において師はその不自由な晩年において「信界建現」誌を發刊し、宗門の革新を叫ばれた。それについては師の大活躍期以来一貫して師を内助せられた令弟常音師の赫々たる信仰の太陽は今や地平線下に沈んだのである。越えて四年、二十年十二月十三日には師の一生を内助せられたきそ子夫人も他界せられた。

大平洋戦争の起る直前に世を去られた常観師、今は靈界の人として終戦十年の日本國を如何にみられるであらうか。二十八年八月六日には常音師も示寂せられた。宗教法案は終戦直後米國の指令によつて撤去せられた。今や正に常観師の光輝が永遠の光として輝き出てねばならぬ時である。常観師を追憶する全国の信仰の士、立つべき時は正に今日にありと思ふのである。

(昭和三〇年十二月廿六日稿了)

予 告

大経五惡段講話

福島政雄著

福島先生が数年かゝつて、大無量寿經の味わいを細かに一道會館でお話し下さいました。それは慈光誌で連続して記載させて頂きましたが、そのうち、五惡段講話を、京都の文昌堂から先ず出版されることになりました。漸次、大経の全体も出版されますこととありますが、私共といしましては誠に喜ばしいこととあります。いずれ出版の時は詳報申し上げますが、予め御紹介申し上げます。

正信偈私解 (十六)

序記 親鸞聖人の生涯

白井成允

祖師聖人は、高倉天皇の承安三年(西三)に誕生し、龜山天皇の弘長二年(西二)に入滅したまうた。まさしく九十年に亘る御生涯であられた。この凡そ一世紀を顧みると其は恐らく日本民族の歴史の流れの最も荒れ狂いて激しい波を挙げた時代であつたと言ひ得よう。則ち貴族藤原氏によりて支配せられた組織が保元平治の乱を経て既に崩れ、其に代りて武家が支配権を奪いあいつつ国を乱したのが其の前半を占めていた。其の間に平氏・源氏・北條氏等武門の興亡盛衰うたかたの如く、其の動亂の波は皇室をも浸しまいらせて、後鳥羽・土御門・順徳三上皇の辺地に遷幸したまう悲劇を生んだ。之を境として其の後半、泰時・時頼の執権の下に辛うじて戦亂を免れた凡そ四十年が続いたが、時頼の死後五年には既に蒙古との交渉が始まつてゐる。而して祖師の示寂は時頼の死の前年に於いてであつた。この激しい時代に、而も祖師の御身をめぐつては此の時代の苦難

がしきりに感ぜられる。則ち初めには日野家の没落、幼くして父母君に別れねばならぬ悲しみ、中頃には恩師法然上人とともに念仏停止の法難に遇われそれに由る労苦は掃落せられて後も続いたこと等、終の頃には孤独にして恐らく貧乏の中に世を終えられたこと等、九十年の御生涯は其の時代の苦悩を背に負いつつ過ごされた相があきらかに偲ばれる。

心に尋ねてみても、私共はどう答へべきかを知らない。ただ心の深く敏い者には同じ外難も他に比べて幾層倍も深く敏く痛切に感ぜられるという事を思うとき、此の如き時代の苦難を祖師の如き御心が如何に鋭敏に感覚し痛切に思惟し荷負せられたか、測るべからざるを感ずる。但だ祖師の御晩年にあらわれた数々の著述は悉く此の艱難の時代を荷い苦悩の民衆を負いたる大心の士の救世の念願の流露であるから、私共はそれらによりて此底知れぬ深き御心の一端をおもひみるのみである。

然しこれらの諸相は単に外側にあらわれた処の一端たるにすぎない。もしその内面的意義を尋ねるならば私共はこれを測ることができない。たとへば、幼くして、父母君に別れたまうたという御悲しみが如何に深く久しくあられたか、越後や常陸などの農民の生涯の悲惨を如何ばかり痛ましく御身に経験したまうたか、恩師の流論・念仏の停止・承久の乱・朝家の陥られた苦難等の禍の波を如何なる御情念を以て受けたまうたか、これら諸の間を掲げてひそかに

人類の精神史上に大いなる使命を負えるものなる事に醒めねばならない。

思うに祖師御在世の一世紀は日本民族の生命の流れの極めて激した艱難の時代であつた。然しその艱難の時代に於いて日本民族の靈性は人類の精神史上稀に見る光輝を放ち燦爛として至高の天を照らした。曾てギリシヤ人がソクラテス・プラトン・アリストテレス・ヘーゲル・シユライエールマツヘル・ゲーテ・シルレル等を生み、各己れの民族的天才を尽くして永久に人類精神史の天空を彩るが如く、日本人は、この鎌倉時代に於いて、法然・栄西・明慧・道元・親鸞・日蓮・一遍等の諸聖を生んで、彼等と身に輝く一星群を成した。而も其の時期はいずれも約一世紀半の短かき間に於いてであつた。私共は人類の精神史を見ることに私共の祖先が艱難の日に於いて此の偉大なる靈性の光輝を証した事を驚歎せずにはおられない。日本民族よ、汝は

然るに鎌倉仏教の星群を成すこれら諸聖の思想乃至信仰は其の源流に遡れば一に日本仏教の開祖聖徳太子に発する。而して太子の仏教は之を南無仏の一仏乗と称することができよう。則ち一切の男女、貴賤老少智愚善惡を論ぜず、苟くも如来に帰依する一念を本とするところ万善悉くに成道の道となることを明かして、万民をして悉く天皇と共に平等に法性の常樂を証せしめんとする絶対道である。この一仏乗の流れが日本仏教の本流と成り、日本文化の基礎と成り、以て日本民族の歴史を生み成してきたのである。之を深く省みるところに、実に日本歴史の世界歴史的使命が明かされると私は思う。日本仏教を頭おす祖師等は各自らこの一仏乗を如何にして身に証し日本国の理想を現成すべきかに心を痛め身を捨てたまうた。上に掲げた鎌倉時代の諸聖いずれも然らざるはない。而も其の最も頭わに著しい者は即ち親鸞聖人であられる。

親鸞聖人が、其の若かりし日より晩年に及んでまで、如何に深く聖徳太子を慕い信じ敬い仰ぎたまうたかは、其の一端を上既に窺うたのであるが、私共は到底之を尽くすことが出来ない。唯太子に於ける南無仏の一仏乗が聖人に於いて南無阿弥陀仏の誓願一仏乗となつたという単純な表現に

約して之を思うに宜しいようである。其の所以は、太子の告げたまうところ「世間虚仮唯仏是真」の法語が、聖人のおおせに「煩惱具足の凡夫・火宅無常の世界は、よろずのことみなもて、そらごと・たわごと、まことあることなきに、たゞ念仏のみぞまことにておわします」に言われてあるによりて窺われるように、虚仮なる世間に眞実を顕わしたまう仏の眞実のおんはたらきが、煩惱具足の凡夫の胸の中に南無阿弥陀仏となりて顕われくたさる事に於いて、聖人は太子の御教が私共罪業の凡夫の身に証される道を明らかにしてくだされたからである。私共は如来の誓願力によりて一仏乗に乘らしめられ、同じ仏果に到らしめられる、其の始終のおんはたらきただ南無阿弥陀仏のみ。実に是れ生死を超えしめる唯一無碍道である。

太子の御疏によりて勝鬘經を窺えば、衆生の各の心の奥に本から無漏清淨の如来藏（仏性）が具わつてゐる、無明の煩惱に覆われて顕われず知られないけれども、仏語に順うて之を信ずるところに即ち眞の仏弟子として一仏乗を行くことができる告げられてある。維摩經はすべて小乗の羅漢（聖者）の自力修行のはかなきを知らしめ空せしめ、之を転ずるところに大乘の菩薩の行道を明かす、即ち自他万法本来空なる一如の源に徹して自在を証せしめる。法華義疏は即ち衆生の修むる万善同じく成仏の一乗を行くに掃

たる人間として免れ難き我執の必然の動きである。この我執の必然が即ち一切苦悩の因なるをみそなわす智慧によりて我執を空せしめ、自他本来一如なる法性の源に帰らしめるところに一切衆生を平等に成仏せしめる一仏乗が存する。之に依りて聖徳太子は日本民族に於いて国家を自覚せしめたまうた当初に憲法を定め、其の初章に、古聖の永遠の法として「和ヲ以テ貴シト為シ」たまひしを掲げて國家の理想が和に存することを明かしたまうた。鎌倉時代に太子を慕ふこと深く、十七条憲法を註したる法師玄恵は二つのものが一つに合うことが和であつて、善と悪と二つに別れるのは和ではないと誡めておられる。然るに無明に覆われたる煩惱の凡夫、我執を空すること難く、他と相和らぐこと難い。此の如く曲がり狂いたる吾等を「共に是れ凡夫なるのみ」と知らしめ、心を直くし行を正しくして和の大海に安んぜしめんが為に「篤ク三宝ヲ敬ウ」即ち究竟して如来に帰依する南無仏の一道を教へ示したまうたのである。この一仏乗こそ日本民族の靈性を照らし来りたる智慧の源であり、日本国存在の世界歴史的意義を成す当体である。然るに今や之が忘れ去られて、同朋日夜鬭争を事としている。憂うべく懼るべきである。

今、親鸞聖人の満九十年の御生涯は、吾等の祖先の苦悩の日に於いて、聖徳太子の遺したまえる一仏乗を如実に御

し、其の修めるところの仏果は是れ無量光明の智慧即ち無量壽命の慈悲であり、此の智慧一如の体こそ一切衆生の根本生命であり、随つて衆生の一たびも南無仏と称する一念に於いて此の根本生命に触れ、仏を成るの一道が開かれることを告げる。

今私の此の解は極めて浅く粗きものにすぎないけれども、而も私は日本民族が國家としての自覚を獲た当初に於いて此の如き南無仏の一仏大乘を告げられた事を以て民族にとりて至幸の事であり日本國の世界歴史的使命を決定した極重の事であつたと思わざるを得ない。事実、日本歴史は此の一仏乗に於いて其の至深の靈性を顕わし来つたのであり、人類の理想を實にし得た程の日本文化の華葉はすべて此の根幹から生じ来つたのである。是れ日本國の將來を考ふる者の深く省みるべき事実である。

然るに明治維新の排仏棄釈の暴挙とマツカーサー元師のキリスト教化の巧みなる方針との下に、今日の日本國民は上下挙りて、一仏乗の大義を忘れ去り、日本國の世界歴史的使命を思うことなく、徒らに二元対立抗争の濁流の中に溺れている。二元対立とは、貴賤・貧富・勞資・正邪・善惡・乃至神と惡魔と等、凡そ社会的に經濟的に政治的に道徳的に乃至宗教的にさえも、総して自他を分別して他を自の力の下に置こうとする立場であり、本是れ無明に囚われ身に証す事によりて、吾等をして等しく仏道を成り大和の國を現わすべき無碍道を明かし示したまうた。太子の遺教に由る「日域大乘相当地」の使命は、太子を「和國の教主」と仰ぎたまうた聖人の教を通して、弥々遙かに達せられるであらう。

憶い起こす、昭和廿年八月十五日、戦敗れて無条件降伏の止むなきを告せたまえる悲痛比無き詔勅の中に、「万世ノタメニ太平ヲ開カムト欲ス」という雄渾嚴肅なる御語の在したる事を。私は翌年正月宮中歌會の御題「あけぼの」に答えて

ひとの世にとわの和らぎ開くべき

御代のあけぼのに立ちにけらすや

と詠んだ。今日改めて省みるに、国亡びんとするに際して而も自然に人類永遠の平和を企願し意志したまう詔勅の出でたる事蓋し容易な業ではない。私は一仏乗大和の伝統の源遠く流久しきを感じ歎せずにはおられない。

ひとの世にとわの和らぎ開くべき

御国のいのちいやさかゆかな

(十二月十一日・小庵にて)

榊 原 徳 草

十月二十五日、例年の通り当寺で故池山栄吉先生の追憶感謝の会合「一道会」が催された。今年は第二十二回の先師の忌日である十一月八日を相変らず取越してとり行つたのであるが、案内状の大半は学会参加とか止むなき事のため不参する旨の返信が届いた。それで今年は少数の法友しか集らない、静かな会になるものと寂寥の感を懐いていた。しかし寺族だけで迎えた御命日の年もあつたし、数人の学生だけでつとめた秋もあつたのだからと自ら慰めてもいた。所が当日になつてみると四十人程の人々が集つてこられた。名古屋からは勿論花田氏、四国からは愛媛の松本解雄氏とその紹介による三好氏水野氏など五人の新しい法友が来会される。久し振りで向島諦宣氏、東京の稲津紀三氏、佐々木徹真氏、中井玄英氏、信国淳氏は止むを得ない事で欠席されたが、代つて奥様が専修学院生三名を連れて参会された。白井成允先生はその日の学会を早目にすませて急ぎ御参会下さつた。西元宗助氏は午前と午後の講演会の相間を無理につくつて馳せ参じて下されて、今日の不参加の會での聖齋寮時代の法友達の消息を伝えて追憶の言葉

に代えられ、早々に大阪の会へ向われたのは感激さゝれた。その他、城一雄氏、四国の木村誠一氏。大字佐平治氏、加藤氏、福本慶子姉、芦屋の梶井英子姉、曾ての同信会の杉原、田端両姉、江洲から宇野柳子姉、それから花田氏の同学の友江口克夫氏が初めて参会下さつた。又会半ばに曾ての聖齋寮の寮友幸寺氏がやつてこられた、昔の弱々しい学生服姿が今は太つた健康な姿に變つていたのは嬉しかった。まことに思いよらぬ盛大な一道会が、忽然として化現したのであつた。凡夫の計らうべきことではなく、先師の『たゞ念仏して』の光の滝は永遠にその光を放ち滝の音を響きつゞけて、こうした希有なる光景を現出して下さるのであつた。

右の会同の人々の外、ドイツに行つていられる川端愛義氏からはお便りがあつた。今年的一道会には是非参りたいと思つていたがこんな事情で出られなくなつた旨、次いで天かけるゼット機の上に称名を唱うるひまのいのかなしも一首を手向けてこられた。

も一人、花田氏の同学の法友、玉尾延忠氏からはひとりいて よろこぶこゝろ給いける
師の君しのぶ きようことさらに
の讃歌を電報にのせて代理参会があつた。玉尾氏には先師の一周忌を期して松本解雄氏の編輯によつて出来上つた追想録「呼子鳥」の追憶文の中にも、先師の懷中に体温を詠みとつたような左の歌もある。

○昭和五年三月三十一日京都紫野に先生を訪う
しわぶきの声はまさしく先生なり
今階段を昇りています(二階にて)

○昭和十年十月二十七日洛北蓮華谷に先生を訪いて
まみあえは念仏したまう先生の
清し御顔にわれは足らえり
右の歌の如きは髣髴として先師の生けるお姿に接する思いがする。その玉尾氏から、あの電報によつての追慕憶念のお念仏の歌がよせられたのである。

その外にもこの会合に出られなかつたことを歎き、昨年の光景をしのぶ北岡法友、病める法契、等々を挙げればまだまだこの先師第二十二回の忌日の構成は、経文序文義の一会の会衆の終りに出てくる『……等、無量の諸菩薩衆、挙て数うべからず』又は『一時に來会す』の文を想起せしめる『大会衆』となつてくるのである。

当日花田氏は、名古屋地方の大風水害のことにつき、未

だ引取人のない数百の尊き遺体を前にして、人間がどうにもしてみようのないこの悲痛の極致が、たゞ往還二廻向のお念仏一つによつてのみ溶かされてゆくことを歎異抄第七章『念仏者は無碍の一道なり』の聖人の息吹きの中から懇切に現在の生々しい信境としてお話し下さつた。

白井先生は近角常観師から常に聞かれた池山先師夫人の胃痛にかゝられた時、死の宣告をうけられた時の念仏の信境について、又撫順の炭坑の爆発で倒れた向坊さんの死を前にして蘇生された前後のお念仏の味わいについて、いずれも現当二世にわたる御慈悲のお念仏を細々と香氣深くお願ち下さつた。なお先生は今日の学会で曹洞宗の宗旨のある所、坐禅、受戒、日常の行事の三つが一体三宝となるとの山田靈林老師の説話についても、吾々念仏者は仏・法・僧の三宝ともに御廻向のお念仏によつて頂かせてもらうこととの有難さを感銘のまゝにお話し下さつた。

稲津紀三氏は、感極つて「私の存在は、先生のお蔭による……」の一語が漏らされるのみで、涙の沈黙のみが続きまことに感銘深く先師の德音に触れるものがあつた。

佐々木徹真氏の愛児二人を伴つての参会は、どうかお念仏の御縁が結ばれるようにとの、唯一つの親の願いの現われてあつた、天地に物言うごとく、独語するごとく、父母の窮極の愛がそのまゝ、大悲の親様の大慈悲の流露であること

を感ぜしめられて、こよなき法味あふるゝものがあつた。
中井玄英氏は無縁の御手廻しが、どこまでも張り
巡らされていることに驚き伏する外なきお念仏の因縁を語
られて、ひとごとでない『大悲憐むことなし常に我を照らし
たまう』の事実私等も共に浴せしめられるのであつた。

向島氏は、唯聞法一つに生きることを話され、福本慶子
姉は年に一度のこの会合が、先師生前の講演「檜舞台によ
び上げられて」の、その檜舞台のようで、こうして毎年々
々一年間のすべてをあげてこの会で溶かされて頂く喜びを
感謝と共に話された。又始めて参会された江口克夫氏は先
師にお育てをうけた長い年月の尊い法味を咄々と自らに言
う如く語り告げられて心を打たれるものがあつた。

その他参会の四国の三好氏の、十年に亘る「慈光」誌の
誌友であつたこと、求道の光に遭えるさま／＼の旅路の模
様を静かに告げられる姿は、友あり遠方より来る、また榮
しからずやの法悦が私に湧き起つてくる、先師もさぞかし
およろこびのこと、心温るものがあつた。同じく水野氏、
外三人の若い女性達、言葉少く来会の因縁をのべられて不
可思議の大悲に涙の流れる嬉しさにおうたのは私のみでは
なかつたことと思う。

夕暗の中を、去年のように、また一昨年のように、一人
二人名残りを惜しみつゝお別れとなる。私は玄関まで送つ

病中のお味わひを聞かせて下さつた中に出てくるお言葉
で、それは病中の夢うつゝのうちにいろ／＼の幻影が現れ
ていろいろの煩惱の世界を恰度ゲーテのファウストの悪魔
に導かれて漏歴する世界のような所を、幾つも／＼夢にみ
られたが、どの場面に出会しても『只念仏号の飛行機で悠
々と乗り越えることができた』との、あの紅潮されたお
顔、和服姿の先師、あんなに長く話されて又御病氣になり
はしないかしらと心配したあの時の「念仏号」であります。

先師には私からもこゝへ一度来て頂きたく思い、度々申
し上げたのだつたが、御病身であり、遂に機縁熟せず、お
出でを願えなかつた。しかるに、御往生の後、御遺骨をお
守りする深重希有の因縁に遭いまいらせる身となり現在に
至つた。この不可思議の因縁は何とも申しようがないこと
であるが、私等が結婚の時「……それではお二人してお念
仏を弘めて頂くんですな」と言はれた、あの先師が一道会
を私等の寺に設け、その法体の御活動が年をふると共に深
く広く、念仏興業盛りとなつてくるのは、たゞ襟を正さし
められ頭の下るばかりである。聖人は御本典開卷第一に
『謹んで浄土真宗を按ずるに二種の廻向あり、一には往
相、二には還相』と筆を下された。その往還二種の廻向が
先師の中から直接に私達に一道会としてこの寺に顕現して
いることを感激をもつて見るのである。

他力の信をえんひとは仏恩報ぜんためにとて

た方もあり、また送らないかたもある。もう計らひの渦巻
きである。噫呼！

追記

この会の法雲たちこむる一端を、聖鸞寮の寮母であり今
は芦屋に老病と神經痛で病臥不参の治田康おぼさんにお知
らせしたところ、とりにくい筆をとつて御返信を頂いた。
その中に先師御在世の或る年の春四月、治田のおぼさんは
八重桜の咲き乱れる私の寺を訪ねられての帰るさに、蓮華
谷の先師をお訪ねした、そして榊原さんのお寺は高台の静
かな、とても気持のよい所です、先生様にも一度散歩がて
らに如何です、と申上げた所、御返事に「それは是非一度
伺いたいものです」とお嬉しそうなお顔が今でも目前にあ
り／＼と写つてきて、何ともかともたゞ感慨無量でござい
ます、との一節があります、その手紙の最後には先生の歌
われならぬ清らのわれのわれにありて

穢悪のわれをわれにもしらしむ

たのまるゝたゞ念仏のわれにあり

さるべき業はさもあらばあれ

と書かれ「お慈悲なればこそ／＼」と書き添えてありま
した。又紙面の余白に雲の画をかいてその上に「有りがた
や、助けにまわる念仏号」とありました。

この「念仏号」とは、先師が大患恢復の後の、最初の御
講演が顕道会館で催されたとき、『たゞ念仏』の題で、

如来二種の廻向を十方にひとしくひろむべし

聖人の和讃の中のいのちがそのまゝ、事実現実となつて開
けてくることを感佩するのである。

まことに吾等の念仏讃仰は、聖人の奉讃となり、池山先
師の追慕となる。仏と祖と師と不一不異、是三無差別であ
るが、また親しく温容を拝し德音に直接ふれた私共は、先
師を一刻も忘れることがない、何でもかでもフト先師のお
顔がでてきて、ひろ／＼とするのである、そこからこれは
聖人の御再来だと思つのである。蓮如上人の『阿弥陀如来
は深くこれを喜びましたして、その御身より八万四千の光
明を放ちたまいて云々』の、阿弥陀如来の容顔妙なるお姿
をも拝するのである。

禿筆を呵し、追慕憶念の一端を述べて、今年の一道会の
記を書きました。来年はどうなるだろう、どうにか生きて
いて二十三回忌にあいたい。私は生きていくのか、どうな
のか、荒漠濛々、雲煙はるかにして一寸先は暗である、し
かと明年は期し難いのであるが、一日でも長生して先師の
お念仏の一道会にあいたいものである。しかし私はどうな
ろうと、大悲のおまことは世の有らん限り、苦惱の有情の
続くかぎり、憊むことなく生死の海を照り映えて止まない
のである。そうして次から次へと諸仏菩薩が化現して休息
あることなきことを仰ぐことであらう。

編集後記

謹んで新春を賀し奉ります。

世の中安隠なれ(以和為貴) 仏法ひろまれ(篤敬三宝)とのらしつゝ念仏申された聖人が一入慕われる去年今年であります。また、共にこれ凡夫のみ、誰かよく是非の理を定むべけんや、と仰せられた聖徳太子の仰せを日本人の殆んどが知りもせず聞きもせぬ現状を省みては、仏徒の使命の大きなを知らされず。

私自身亡き父の年を迎え、思出の深い年になりました。読者の方も御経験のある方は御感下さることを思います。

ちゝのみの父のよわいを迎えけり碌々として為すこともなく、聚墨生(五十七才)

△四回に分けて頂きました近角先生の「繫縛と解脱」は皆様が感銘深くお読み下さいましたとの音信を沢山頂きました。有難いことでもあります。年頭は「自然と廻心」を頂きました。御味読願います。

△靈界の人 近角常観師の福島先生の原稿は、先生のいのちの師と仰がれる御心が満ちあふれて襟を正さしめられました。何時までも遺つて行く先生の御伝記の一つとなりましょう。

△正信偈私解の白井先生の御原稿は、聖人の御伝を終つて下され、次回から偈文の解を頂き得ることになりました。朝夕に御仏前に誦しまつる偈文、信徒の身近かに与えられたものを深く味わわして頂く助縁にさせて頂きました。

△一道会の記は榊原さんにお願ひ致しました。榊原さんは先生の御遺骨をお守り下さつて二十二年、初めの程は御一家で御忌日をひそかにおとひ下さつていられた幾年かの歳月、やがて十七回忌をお迎えした時に初めて一道会の集いとなりそれから年々、浄住寺の報恩講としてお催し下さいました。過ぎ去れば夢とは申しながら二十二年間、静かにお守り下さつた榊原さんに厚く御礼を申し上げます。

歳末、歳始、全遞のストで郵便物が混乱し、市内でも一週間も通信の日がおくれたこともありました。皆様にお心配おかけ申したことを思います。又そのために賀状を頂きましたも御礼を欠くこともあらうと思ひますが、御読承下さい。私自身も十二月以来痼疾に運和を覚え、外出をしばらく禁止して居ります。一月は出張の予定を皆取り消しました。然し急にどうという程の状態ではありませぬ静居して春暖を待てばよろしいと思ひます。御放念下さい。

御案内

第一、二、三日曜例会。南区駈上町二ノ八。(番地訂正) 一道会館。午後一時半、市電、新郊通り一丁目下車、東二丁半。名鉄、呼続駅下車、徒歩十五分位。国鉄、笠寺駅下車、市電乗換え。河和、常滑線、大江駅下車、市電乗換え。

共にこれ凡夫のみとねんごろにおしえたまいし聖太子かしこ

聚墨生

定価 一部 二十四(送共)
 半年 百二十円(送共)
 一年 二百四十円(送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八
 編集・発行人 花田 正夫
 名古屋市千種区千種町馬走二八
 印刷人 本田 政雄

発行所 慈光社
 振替口座名古屋一〇四七〇番